

北山理論における「うつろい」概念についての一考察

森 一也

1. はじめに

心理療法において生ずる人間の変化、そして治癒をどう捉えるかは諸家によって異なる。大きな物語が失われたポストモダンの現代において、人間の成長、変化、教育を捉える価値観は多様なものへと変化してきた。しかし、「あるべき人生」というヴィジョンが失われる中で、社会においては効率性が重んじられ、捗々しい成果こそが強調される側面がある。これらは、日本において、1998年以降、うつ病による自殺者数が増加し、その後、高止まりしていることとも無縁でないだろう。鷲田（2003）は、現代の成果主義的なあり様に、産業革命後の西洋近代が抱える前のめり「pro-」の姿勢、前望的 pro-spective な時間意識を見た。そこでは、「捗る（はかどる）」ことにこそ重きがおかれ、計数可能で、目に見えてわかる変化が取り沙汰されやすい。反対に、「はかない（捗ない）」もの、ここで「はか」の本来の語源に拠るなら、「はか」がない、つまり、努めても努めてもその結果が手に入れない、「あつけない」、「むなしい」という意味内容と体験は軽視されがちである（竹内, 2007）。

本来、心理療法、とりわけ力動学派は、そういった社会で取捨されがちな、断念や諦め、時に抑うつを伴う、人格の変容を一つの相として重視してきた。Bohm（1992）は、心理療法における変化の緒として、「内的生活を持つという感覚 the feeling of having an inner life」が生起するという。心理療法において生ずる変化は、現実生活とは異なる時間軸で生じ、その機微を捉える視点や感性が心理臨床家には求められる。本稿では、心のさらに深層に生ずる変化を捉えるための枠組みとして「うつろい」という概念に着目し、その意義を論じた北山修の論考を、「うつろい」の観点から整理し、考察する。

北山は、精神分析の立場から、古事記や民話、浮世絵の母子像、春画に描かれた二者あるいは三者の光景に目を向け、日本人の<きずな>や<つながり>の発生について探求してきた。北山のまなざしは、常に、人と人との間や背景、そこに読み取られる人と人のつながりに向けられる。<つながり>が断ち切られる、つまり、「関係」の中で、自己がいかに変化していくかということや、日本文化が持つ<あわい>とも重なる、中間的な体験の位相が重視される。本稿では、「うつろい」を、北山（1998）、黒川（2004）、岩崎（2016）を参考に、「浮かんで消えゆく、つまり、はかない対象を通して得られる、過渡性を帯びた体験の相」と定義し、論を進める。北山理論を展望し、「うつろい」の概念的整理、論点の抽出を本稿の目的とする。

2. 「うつろい (Transience)」とは何か

「うつろい (Transience)」という概念の初出は、「Transience: Its Beauty and Danger」(Kitayama,

1998)であるが、これは再度、2004年にまとめ直されている。この論文は、異なる文化圏に向けて書かれたものであった。北山は、冒頭、1995年の神戸大震災で生じた取り返しのつかない喪失と、ある男性患者が語った無常観を取り上げる。その洞察的な感覚を、北山は、「新しい始まりへの急性移行の最中にみられる、取り返しのつかない喪失に対するごく一般的な反応」と評し、その意義を強調する。

前半、「うつろい」が一つの文化的現象として位置付けられる。北山は、「うつろい」を、浮世絵の母子像の中に見出した。北山は、約2万点の浮世絵のうち、母子像が描かれた約450枚を抽出し、さらに「母子関係」のあり様を描き出す目的で、絵に描かれた人物像の「姿勢」や「距離」に焦点を当てた。母子の位置関係に基づき、「密着」、「対面」、「共同注視」など7カテゴリで分類したところ、約3分の1以上に「横並び」、「共視的」な関係を見出した。また、絵の重要要素として、「ゆらゆらゆれるおもちゃの魚」、「朧月」、「水面に映る顔」、「雪兎」などの媒介物が描かれていることも判明した。ここで見出された媒介物は、「雪兎は溶け」、「泡は消える」、いずれもいつかは動きを止め、消えゆくものである。北山は、そのプロセス自体が、Freud (1856-1939)が言う、フォルト・ダーとダー・フォルト、つまり在と不在の間を行き来するものだという。そして、その媒介物は、Winnicott (1896-1971)の「移行対象 transitional object」と同義である。その対象は、「忘れ去られたというより、宙ぶらりんに追いやられた。忘れ去られるのではなく、弔われるのでもない。それは意味を失う」(Winnicott, 1951)ものである。北山は、「うつろい」は、「彼らの将来を示すものであると同時に、美しい母親像や濃厚な母子関係が短命であることを、美化されたかたちで予言している」(『見るなの禁止』, p. 32)と続ける。そこでは、「過渡性を帯びた状態」という自己のあり様、「媒介物」という対象、「共視的」な関係性が強調される。

次に、北山は、日本語論の観点から、「うつろい」を日本固有の概念として位置付ける。英語圏で、「移行 Transition」と「うつろい、はかなさ Transience」は語句として明確に区別される。Winnicott (1951)の「移行対象 Transitional object」は、本来、物理的・空間的移行をさしており、そこに「移ろいやすさ」、「はかなさ」といった意味はない。しかし、日本語で「うつろい」というとき、「移行」という物理現象以上に「はかなさ」の情緒が強調される。Freudは、「無常」(Vergänglichkeit) (On transience)において、「はかなさ」の消極的体験を批判し、「美しいものは消滅するからこそ美しい」とその積極的意義を述べた。また、日本で広く流布された仏教思想に「無常観」がある。「生まれたものは必ず死ぬものであり、変わらないものはない」という東洋思想に基づく教義である。「うつろい」は日本人が伝統的に強く意識する諸行無常と重なる。

そして、後半、北山は、事例をあげ、臨床場面における「うつろい」の具体的なあり様を考察している。ここで、その背景となるのが、北山による「見るなの禁止」、「自虐的世話役」概念である。北山は「はかない」対象への憧憬の背後にある、**傷ついた世話役 Wounded caretaker** (Kitayama, 1991)の問題を取り上げている。呈示された2事例(男性例、女性例)は、いずれも自己破壊的な献身のみられる事例であり、その背後に、傷ついた世話役である母親像への万能的な同一化という対象関係の問題が生じていた。男性例は、精神分析の過程で強迫的な祈りの背後に、母親のマゾキズムへの同一化と、そこに隠された彼の全能感を洞察していった。つまり、2事例の対象関係においては、母親のマゾキズムに同一化する自己-対象部分と、対象を

サディスティックに攻撃する自己部分と、その罪責感の万能的な打ち消しとして、強迫的な祈りが生じていることが明らかとなっていった。母との幻想的な結びつきを見ていた彼は、それに気づき、距離を置く過渡期を経て、母との関係の「儂さ」を自覚した。そして最後に、彼が語った「ありがたさ」は、日本的な「存在することが難しい」という意味を持つものであり、彼はそれを噛み締め味わうことになった。

次に、日本人の「罪悪感」の問題が論じられる。「見るなの禁止」論は、母親の尽きせぬ献身により傷ついた母親像を見るのがいかに難しいかを教えてくれるものであった。神話で禁を破られ怒ったイザナミのように、侵入され、恥をかかされた対象は自己愛的な傷のために怒っているのかもしれない。しかし、「夕鶴」の鶴女房のように、羞恥心、罪悪感からそれを表現することができず、その対象の「醜さ」はさらに「見にくい」ものとなる。そこに日本人固有の罪悪感の問題と、その取り扱いの難しさが述べられる。ここに、「うつろい」を停滞させる、より文化的な要素が見出される。「罪悪感」論は、古澤（1954）の「罪悪感の二種-阿閩世コンプレックス」における、「処罰型」と「許され型」の分類から始まった。これを北山は「押し付けられた罪悪感」としてまとめている。日本人の罪悪感とは、西欧とは異なり、ある種の「負債」のように体験される「すまない」という馴染みある感覚である（北山, 2021）。本論の最後、北山は「儂いものへのマゾヒスティックな同一化は、無限の負債の蓄積とともに起こり、その結果、自己を含む全てが儂いものと感じられるようになる」と結んでいる。

以上、「Transience: Its Beauty and Danger」では、「うつろい」の否定的・肯定的側面、病理について、北山の持つ精神分析学、日本文化論における広範な学識を基にした論考が展開されている。「うつろい」の本質に迫るためには、その地を成す北山理論の変遷を追い、その概念をより深く理解する必要があると考える。それは、精神分析が示すように、歴史を知ることから現在の問題を理解する枠組みを学ぶことができるからである（西, 2019）。次章では、北山理論を展望し、「うつろい」概念にまつわる論点を整理する。

3. 北山理論における「うつろい」概念の展望

方法として、①学術情報データベース検索 CiNii を用い、「北山修」で検索してヒットする論文・著作を抽出した。該当した 623 件のうち、内容が重複するものや、他分野の論文は除外した。北山の論考は多領域に渡るが、今回は心理臨床分野に絞って抽出した。それらを、論文、著書、翻訳本、研究（科研費申請が成されたもの）に分類し、整理した（表 1,2）。②年代に沿って理論展開を追い、重要と思われる要素を抽出した。なお、枠組みとして、妙木（2015）が挙げた以下の 3 期に分類した。[第 1 期]「その着想の試行錯誤・構築段階」、[第 2 期]「<見るなの禁止>、<自虐的世話役>などの精神分析概念の創出がおこなわれる時期」、[第 3 期]「<A と A ではないものが重なり合う領域>に関する臨床理論の確立と展開の時期」である。

[第 1 期] その着想の試行錯誤・構築段階

(1) パブリックとパーソナルの複眼視

「うつろい」概念が創出される以前の時期について述べる。北山は臨床家としての歩みを始める前、マスコミュニケーションで活動していた。1974 年、北山は、マスコミでの活動を休止

し、内科での研修後、英国へ留学する。これが北山の精神科医としての研修の始まりである。北山は当時、マスコミでの活動に失望し、パーソナル・コミュニケーションへとその目を向け始めていた。たとえば、北山は次のように述べている。「臨床家である筆者は、出会いのない活字媒体によるやりとりについて、徹底的な不信感を抱いている。出会った相手の心だけを分析する職業人として、これほど手応えのない情報交流は、マス・メディア以外の場にはないと断言できると思う」と。そして、「この状況を前向きに解決する方法の模索が、共有されるものとしての神話の分析へと私を導いていった」（『悲劇の発生論』, p. 14）と述べる。後に、北山は自著を発表する際、「きたやまおさむ」と「北山修」を分類して用いているが、これは、北山自身がマスとパーソナルの領域を、分裂でなく、分割として位置づけ、活かすためだったと想像できる。北山の発想の航跡を辿ると、そこに大衆・公衆（パブリック）と個人・内界（パーソナル）の**複眼視**を見てとることができる。

その後、北山の視点は神話分析へと移行する。Freudは「夢分析」において、神話を「諸国民全体の願望空想の歪曲された残渣、若い人類の現世的な夢」、「自分の好きな童話の記憶が自分自身の幼年時代の記憶に代わってしまっている人々がいる」と述べ、神話研究の臨床的意義を論じた。分析心理学のJung（1875-1961）は、夢および妄想や幻覚の内容に神話の主題やイメージに類似したものを見出し、神話を生み出すものに、個人の無意識に存在する集合的無意識を仮定した。集合的無意識、つまり文化の層からここに迫るJungに対し、北山が立脚したFreud派は物語の起源を個人の心理や育ちに還元して捉えるところに特徴がある。とりわけ、初期のFreud理論に基づく精神分析は、還元主義的理解や内容解釈の徹底から、自説の証明に神話を用いる事が多かった。しかし、次第に「同一化対象の供給などの、人間形成における発達促進や自己理解のために神話が用いられるようになった」と北山はいう。北山は、神話分析の意義を、「古代の人々の思考様式を知るための、資料としての魅力にあるわけではない、それは何よりも**私の内なる古代**、つまり私が忘れかけている古い記憶や空想を、記紀の神話や昔話をとおして思い出せるかもしれないという期待を抱かせる点にある」（『悲劇の発生論』, pp. 14-15）と述べる。これは、還元主義ではなく、Jung派による文化の視点とも異なる、**自己分析**に重きを置く精神分析の視点をよく表している。さらに、北山は、「こちらにやっこない人とは、出会えない。そして、この状況を前向きに解決する方法の模索が、共有されるものとしての神話の分析へと私を導いていったのである」と続ける。そうして、「私たちみんながかつて見たことのあるもの」で「両者がともに同じものを眺めるという体験を少なからず可能にする」（『悲劇の発生論』, p. 15）と神話の意義を照らし出す。ここには、**共視**という、北山らしい発想の仕方、方法論を垣間見ることができる。

妙木（2015）は、北山のマスコミ体験から精神分析への移行に、「他の人にはあまり体験できないであろう、パブリックからパーソナルへの移行」を見ている。その視点は、北山が開業後、創出した、「設定」と「マネージメント」の理論にも一貫する論点だという。このように、北山は、個人と公衆を往来しながら、それらを対比させる中で理論を着想し、深化させていった。そこには、北山という個人の「複眼視」から「共視」への往来を見て取ることができる。こういった北山の在り方そのものが、「うつろい」の動きであると考えられる。

(2) 医療と精神分析学—時間性への着目—

北山が精神科医として初期研修を始めたのは、ロンドン大学精神医学研究所モーズレイ病院であった。モーズレイ病院は当時から行動療法のメッカとして有名であった。それゆえ、初期の業績には行動療法に関するものが見られる。初期の訳書である「恐怖の意味：行動療法の立場から」は、行動療法の重鎮である Rachman (1934-2021) の著作である。その後、北山は外来精神療法ユニットに移り、自ら Hayley (1913-1993) の分析を受けながら、精神分析に傾倒するようになった。当時、モーズレイ病院において精神分析は「洞察に向けられた精神分析的な精神療法 insight-directed psychoanalytically-oriented psychotherapy」と呼ばれており、常に行動療法との対比の中で語られていた。当時、北山が研修として担当した2症例も1年という期間限定のものであった。その報告を読めば、国民健康医療保険の枠組みに精神療法が組み込まれていた英国で、「長く、深く」を志向する精神分析が、その効率性、実証性という点でいかに厳しい目に晒されていたかが見て取れる。北山自身、この時期の経験を「実証と実験を重んじる英国精神医学会においては、何らかの形でその説得力と精密度を増す努力が精神分析学者に要求されているのである」(『内なる外国人』, p. 50) と述べている。後年にも「心理臨床家の医療との連携技術の開発(科研費研究)」(1994) など、常に一開業医、精神科医としての視点が現れる。ここに、医療経済に基づく「効率性」、「時間制限」に対する北山の意識を推察できるだろう。

3年間の研修後、精神科病院に勤務した北山は、「時間性」に着目し、「精神療法と時間的要因」の3部作をまとめている。妙木(2015)も着目したように、ここで、北山は、一般的な時間の流れと精神療法における時間感覚、また、精神分析における「無時間性」と短期精神療法の「有限性」を対比させ、次のように結論づけている。「時間が存在せず無限の時間を指向する精神と、死に向かって有限の時間を生きる肉体の両方がかかえこんでいる存在であると大胆に表現される矛盾を引き受けなければならないのは、まず治療者自身だろう」と。

つまり、ここで北山は、治療者自身が「無時間性」と「有限性」を抱え持つことの重要性を示唆していると捉えられる。それは、移行段階という、時間要因を含む「うつろい」概念とも関連するだろう。本来、精神分析の重要な治療概念である「無意識」は無時間性を帯びたものである。それゆえ、治療者は「無時間性」に身を置く必要がある。そこには、円環的な時間の流れに身を置くことで、反復して繰り返す時間の流れを取り上げるという目的があるが、その実現には、外枠としての治療構造と、治療者が直線的時間の流れをも意識している必要がある。その姿勢が失われると「無時間の感覚 sense of timelessness」に陥ると北山はいう。しかし、現実条件に加え、治療者の「対社会的葛藤」、「科学的モデルへの不適応の不安」は、治療者に時間への「こだわり」を生じさせ、容易にその姿勢を失わせる。北山は、治療者が逆転移感覚も含め、直線的時間と円環的時間への意識を維持することの意義を描き出している。それは、たとえば、心理療法における治療者の「虚心坦懐」な受身的傾聴や、「数ヶ月、数年もかかってやっとはっきりした形をとってくる、ほんのちょっとした変化にも魅せられたように観察する」、「治療者の忍耐力」において現れる。その際、治療者、患者の間で共有される時間感覚を、北山は「稀有な時間感覚」と呼んだ。これらの治療的態度、姿勢は、「うつろい」が内包する時間性のあり方とも密接に関連するものと推察される。

〔第2期〕精神分析概念の創出がおこなわれる時期

(1) 傷ついた世話役論

先述の通り、「うつろい」の成立・維持には「関係性」が関連する。「うつろい」にまつわる対象関係を考察するため、北山理論の鍵概念である「傷ついた世話役」に注目する。

「時間性」に関する論文から3年後、初期の論考が『悲劇の発生論』にまとめられる(北山, 1982)。同書で、北山は神話と様々な異類婚姻譚、たとえば、『道成寺伝承』、『蛇性の姪』、『浦島太郎』、『豊玉姫説話』を取り上げ、そこから北山理論の最重要部分をなす「悲劇の発生」、「見るなの禁止」論を創出する。北山は、民話の中に、人間と異類の間の結合、そして悲劇的な離別という「悲劇の発生」にまつわる共通した構造を見出す。当時の著作では、それらの物語が、いずれも男性主人公の精神病理に従って、3つのカテゴリー(抑うつ的、アンビヴァレント、そしてパラノイド)に分類されている。『道成寺伝承』で、誘惑された僧は後に蛇と姿を変えた女性を見てしまい、そこから逃げ惑い、そこに僧のパラノイド傾向が抽出される。『浦島太郎』では、主人公が両親の喪失と直面し、開けることを禁じられた箱から出た脱錯覚の煙を見た時、理想化された王女との体験からの突然の幻滅を体験する。そして、『蛇性の姪』などのアンビバレントタイプでは、妻は接近し、男と結婚して幸せをもたらすが、彼が要求ばかりすることで、動物化した妻の姿を覗き見、悲劇的な別離へと至る。いずれのタイプにおいても共通するのが、母親像への未解決なアンビバレンツと、恥の問題である。

「傷ついた世話役」は、先の「Transience:its beauty and Danger」(Kitayama, 1998)で述べられたように、「うつろい」の病的現れとしての「はかない」対象への固着と密接に関連していると考えられる。つまり、その物語の背後には、母親像への病的同一化という**対象関係の問題**が想定される。

「傷ついた世話役」論の基調となるのは、エディプスでなく、母親像の幻滅であることが大きな特徴である。Freudのエディプス・コンプレックスにおける「犯禁」という強い禁止に比べ、ここで焦点が当てられるのは、日本的な、破られやすい、いずれ破られる運命を持つ禁止である。北山は『古事記』のイザナギ・イザナミの神話にも同型の反復を見出している。これらは、近親姦のタブー、すなわち三者関係における「守られるタブー taboo to be kept」と対比して、いずれ「破られるタブー taboo to be violated」である(竹中, 1977)。

妙木(2005)は、時間とともに破られていくタブーが、ある程度の時間を待てるものならば、主人公にも異類にとっても、悲劇的な結末に至らない可能性があるとして述べる。つまり、「うつろい」の背後には、緩徐に訪れる対象喪失が想定される。『浦島説話』は、「見るなど言われた玉手箱を開け、急激に老いてしまう」、『イザナギ』は「見るなど言われるものを見て、迫害される」というように、拙速な暴露が「破られるタブー」を破り、悲劇へと繋がる。そうして、拙速に暴露した側は迫害感や罪悪感から去り、覗かれた異類の側は、羞恥心に怒り、傷つき、迫害者となるか、抑圧された体験が意識と無意識の境界に隔離される。「傷ついた世話役」は、「うつろい」が失敗する際の、病的な対象関係を表していると考えられる。

(2) 「ケガレ」の分析と保持機能の問題

次に「ケガレ」の理論を取り上げる。この理論は、「うつろい」が生じうる個人の要因により

迫るものである。この時期、北山は「穢れ」、「汚さ」の文化的側面に着目していた。例えば、日本における禊などの儀式的慣習、文化と重ね、その心理が分析される。そこで、北山は、肛門期的な「保持機能」の問題に焦点を当て、理論を構築していった。

「ある強迫神経症患者の吐き気について」（1982）では、祈祷強迫を主症状とした神経症患者の治療経過を通し、対象の処理にまつわる吐き気と肛門期的な衝動の結びつきを述べ、「吐き気」の背景に「吐きたい」という肛門期的衝動と保持の問題があることを見出した。続く「汚したい」について」（1984）では、「ケガレ（汚れ、穢れ）」の問題が明確に取り上げられる。「ケガレ」の問題は、従来、文化人類学と精神分析学の境界に位置していた（Roheim, 1980）。「ケガレ」は、日本の民族において、古くから祓い、清め、禊ぎという民族儀礼として共有され、これらはさらに国家神道を媒介装置として敷衍されていた。「ケガレ」は、「特殊で異常なもの」、「不浄で穢れたもの」、「邪悪で、罪、死、病気、不具、怪我などの人間の不幸に係るもの」など広い意味がある。清潔白く、不純なく汚いもの、不思議なくわからないものは、やがて周辺の境界、悪所においやられることが文化的側面では普通とされていた。

また、「日本語が外国語と比較された時、『ねじれた音』、『摩擦音』が少ないのは、清明性を貴ぶ国民性にあるという言語学者の言説が、既に清く明るくないものに対する徹底的排除が言語にまで浸透していることを表している」という北山の見解は示唆深い。濁っているより澄んでいる方が貴い、闇よりも明るい方が安心という精神性が日本にはある。文化人類学者の Douglas (1921-2007) は、不安や汚穢の発生が、境界線上の出来事に集中しやすいというが、これを北山は、「社会的な境界に関心が集中するのは、排泄物が入り出す身体の内と外の境界に懸念が生じるからである」と、精神分析の視点から捉え直した。そうして、「ケガレ」の背後に、以下の「清潔訓練」、「肛門期的な保持の問題」、「境界の確立」が見出された。

- ①対象を汚したいという衝動
- ②対象を汚して満足や快感を得る傾向
- ③肛門サディズムを意識するとすぐに行動になってしまう時の、保持するときの包容力のなさ
- ④肛門期的な分極傾向を持つ対象関係
- ⑤対象汚染の苦痛とそれを防衛する強迫行為
- ⑥物質のように取り扱われる罪としての自己不浄

「ケガレ」を洗い、禊ぎを行うのは単なる反動形成でも、儀礼でもない。そこには、<汚いもの>、<割り切れないもの>にまつわり、清潔訓練の段階とその時期に残されたコントロール、すなわち、保持と排出の問題があるとするのである。人が<汚したい>に動かされやすいのは未消化物排除に身体的快感が伴うからだと精神分析学からは理解される（上記の③）。肛門期的な、未消化物が溜まること<くたまらない>という要素と、外部に放出される過程が、身体的排除に伴う快感の中核にある。そして、その中間的な、混合と汚染の状態に伴う生理的な嫌悪感を回避すべく、祓いや祈祷、さらには洗浄などの打ち消しが発生する。これは、先述の通り、拙速な暴露に繋がるため、「うつろい」を失敗させる個人の要因といえる。また、北山は神話分析の視点から、個人における汚穢と禊の問題を次のように描き出す。

「例えば、古事記神話の場合、『邪心（キタナココロ）なし』、『異心（ケシキココロ）なし』と主張するスサノオが、アマテラスに『心の清く明き』であることを試されている。この『誓約（ウケイ）』により、心の清明であることを証明できたというのだが、スサノオはその勝利に乗じ、調子にのり、高天の原の神聖や儀礼を汚して人を殺すという乱行となる。このとき殺されるのが神に奉る布を織る女性であり、彼の乱暴が主に、神聖な場所や農耕儀礼を対象として、そのエネルギーの源は『くそまり散らしき』という彼の身体下部から排泄物が排出するときのものである。そして、アマテラスはこの排泄物による乱暴を認めず、酒に酔って『吐いた』のであろうというすり替えによって解釈して、またその攻撃を受容することができず最後には『見畏み』、天の岩屋戸のなかに隠れてしまう」（『心の消化と排出』, pp. 35-36）。

以上から、臨床的な結論として導き出されるのは、「うつろい」の失敗には、肛門サディズムに基づく「排泄」と、「保持機能」、そして境界の問題が横たわるということであろう。肛門期の相から見て、境界例における「ちらかす」「ひっくりかえす」「汚す」という「しまり」の悪さは、保持と境界維持の問題と捉えられる。境界例では、汚いものが漏れることが恐れられそれが強迫症状をもたらすが、それら内的なものが実際に保持されないですぐに漏れてしまう。ここが神経症であれば、何とか保持される。ここに、「うつろい」 ゆくための要因として、「心の未消化物を置いておくこと」という結論がもたらされる。

数々の神話、異類婚姻譚においても、主人公は「保持できない」「待てない」、それ故に悲劇が発生する経過を辿った。「くそまり散らしき」を留め、置いておくこと、その欲動が時間の中で溶かされ、断念され、やがて、個の歴史に組み込まれていくというプロセスが「うつろい」においても重要だと考えられる。妙木（2005）は、次のように言う。「そして永遠に見えない醜い領域は、文明化＝意識化＝成長とともに覆いかけられて、見にくいものになっていく。だから臨床的に大切なことは、その見にくさをどう抱えるかということだろう」（『北山理論の発見』, p. 9）と。

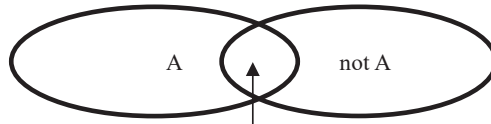
(3) 「曖昧領域」の持つ意味と重要性

「ケガレ」の分析から生じた、「曖昧領域」への着目は、その後、北山の重要な視点、スキームへと発展していった。文化人類学において、タブーの対象になるのは、「A でもあれば A でないもの (not A) でもある」という境界領域である (Leach, 1976)。北山は Leach の境界理論を元に、前項のように臨床的な視点から「タブー領域」の理解へと論を進めていった。タブー視され、排除されるものの意味論を語ろうとする際の心構えとして、以下の点が強調されている。

同類「A」の<和>を壊す「not A」を、「 $A \cap \text{not A}$ 」の印象で述べてしまうのは正確でない。図 1 でいえば、「not A」を理解しようとするとき、「 $A \cap \text{not A}$ 」が誘い出す、割り切れなさに伴う苦痛が生ずる。そのとき、「A」が分かっている、「not A」はまだ分かっていないのであれば、「not A」を「 $A \cap \text{not A}$ 」の印象で言うのは正しくない。大抵の場合、「 $A \cap \text{not A}$ 」が誘い出す、割り切れなさに伴う苦痛のために、「not A」をよく見ていないのであり、「not A」の意味は不明なままである。「not A」が「 $A \cap \text{not A}$ 」とともに忌避、排除されてしまいやすいとすれば、「not A」に「 $A \cap \text{not A}$ 」についての感情が置き換えられているに過ぎない場合が多くなる。ゆ

えに、「not A」を理解するためには、「 $A \cap \text{not A}$ 」の割り切れなさに耐えねばならない。

ここで北山は、＜AとAではないものが重なり合う領域＞に着目し、臨床上、通常はタブー視され、忌避される「曖昧領域」、「両義的な重複領域」に留まり、考えることの意義を強調した。また、そこで北山は、「両義的な重複領域」の持つ潜在能力、可能性に焦点を当てている。この意味論上のスキームは、「うつろい」が生じるための必要条件を示していると捉えられる。二分法や、曖昧な領域が割り切れず、拙速に特別なカテゴリが生み出されたり、あるいはタブー視されたりすることで、「うつろい」の持つ多層性が失われるものと考えられる。



両義的な境界帯、「聖なる」領域でありタブーに従う

図1. Leach,E.(1976)による図

[第3期]「AとAではないものが重なり合う領域」に関する臨床理論の確立と展開の時期

先述のようにして、北山の理論は、「AとAではないものが重なり合う領域に留まろうとすること」の理論へと展開した。この理論は、一つのスキームとして、「心身両義性」、「言葉の橋渡し機能」、「日本語論」と広く敷衍化して用いられている。また、「AとAではないものが重なり合う領域に留まろうとすることの理論」は、北山が翻訳を通じた Winnicott との対話で見出した、「中間移行体」の考えにも深く関わると考えられる。

妙木は2005年の時点で、北山理論が指し示す、今後、日本独自の精神分析が発展する可能性があるベクトルとして、以下の2点を呈示している。①物語の分析を通じて、タブーやその周辺の見にくいこと＝汚穢や醜さを視覚領域から説明する可能性を持つ、②身体と心、偽りと本当、表と裏といった二分法の間にあいまいな領域にある中間領域を理解する、そしてその領域をメタファーによって橋渡ししていくための言葉を運用する可能性をもつことである。その後北山の論考は、日本の子育て、親子関係に関し現代理論に合わせて深化を続けているが、「うつろい」に関わるものには以下の点が抽出できるだろう。

(1) 三角関係化 triangulation と原光景

母子関係論と併せて、北山(2021)は、三角関係化 triangulation の問題を論じている。「うつろい」は先述の通り、三角構図、つまり共視の関係において生ずるため、三角関係化の問題が密接に関連してくる。ここでいう三角関係化とは、現象の背後に、父、母、子という三者関係のプロトタイプを想定し、その力動から、排除や差別の問題を捉え直すものである。その力点は、母子関係論にある。北山(2001)は、幻滅のプロセスを、幻滅1「同じものについて理想化された幻想と食い違うもう一つの幻想と出会う(アンビバレンス)」、幻滅2「理想化されたものの不在の直面」、幻滅3「三角関係」という段階によって論じた。「うつろい」は、主に「幻滅1」から「幻滅2」、つまり二者関係が強調されてきたが、そこに「幻滅3」の要素がもたらす情緒や、その日本的なあり方については、まだ十分に論じられているとは言い難い。この点は、日本における「川の字寝」の文化と関連して、理論的發展の可能性を持つ論点であろう。生後まもなくから、寝室が分けられる西欧と、添い寝が続く日本では三角関係化と原光景の現

れ、性愛のあり方が異なる可能性があると考えられる。

Freud 以降の精神分析が、認識の難しい無意識の領域において、患者の主体化、そして近年に治療者の主体化を目指したのに比べ、曖昧化、つまり主客未分化な認識に重きを置く流れがあると妙木（2005）は指摘する。この点は、日本文化に根差し、西田幾太郎らが目指した主客一体の論理とも一致するベクトルを持ち、ここに、二者関係を起点とした第三者性という、日本独自の発達観・臨床観の起点があると筆者は捉える。「うつろい」の最中に現れる第三者性は、日本独自の様相を呈する可能性があるろう。

(2) 対象喪失-死につつある母親と悍ましき-

近年、北山（2023）の「沼」の論考では、「国生み神話」が「醜い」と描いたものの「死につつある母親 dying mother」を見ることの問題が見出された。これは Green の死んだ母親 Dead Mother の問題（Green, 1986）と重なり、「うつろい」に内包される対象喪失の問題とその取り扱いについて再検討を促すものである。「母親は死にかけているが、生きるかもしれないのであり、生死を彷徨うわけのわからないもの」と北山はいう。そして、「その『わからない』ところには、父と母、表と裏、生と死、人間と動物、ペニスと膺などが、重なり合い、連み、ドラマティックに入り混じって溶け合う」と言い、言語以前の体験が強調される。

「うつろい」の美は短命であり、その背後には、内的イメージとしての自己-対象における「死」の問題が存在する。傷ついた内的対象-自己とサディズム、万能的な修復が洞察されない形で横たわれれば、自己の成長は妨げられる。日本においては、九相図という、死体が朽ち果てるまでの経過が九段階に分けて描かれた仏教画がある。従来、仏門の修行では、死体の変化を直視し、観想することが修行の一環として取り入れられ、自他の肉体への執着を減却する意味を持つとされた（山本, 2015）。対象を断念した先に無常がある。「うつろい」は、対象の腐敗、死という、言語以前の「悍ましき」と出会う体験を、必然的に伴うと考えられる。

4. おわりに

本論では、「うつろい」という観点から北山理論を展望し、考察した。その結果、「うつろい」にまつわる重要な論点として、以下の点を抽出した。

- ① 「時間をかけること」の重要性（有限性と無時間性）
- ② 治療者側の複眼視と共視
- ③ 傷ついた世話役 Wounded caretaker（と自己）への注視
- ④ 日本的罪悪感論
- ⑤ 「ケガレ」の分析と肛門期的サディズム
- ⑥ 「A と A ではないものが重なり合う領域に留まろうとすること」の臨床理論
- ⑦ 三角関係化 triangulation と原光景
- ⑧ 対象喪失と死につつある母親 dying mother

「うつろい」は、心理療法において生ずる変化を、「関係性」の視座から捉え直し、それを日

本文化と関連づけ考察するための有用な概念となる可能性が考えられる。「うつろい」には、自己のあり方だけでなく、共視的關係、媒介する対象など、「関係性」の要素が密接に関連するであろう。「うつろい」概念は、「はか（抄）」があることを一元的に重んじる成果主義とは異なるベクトルや時間性を持っており、心理療法の場に生じる特有の事態を照らし出す可能性があると考えられる。今後は、より様々な領域、学派における「うつろい」を展望し、検討する必要がある。また、臨床例に即し、「うつろい」の病的、発達の側面を記述していく必要があるだろう。

引用文献

- Bohm, T. (1992). Turning Points and Change in Psychoanalysis. *The International Journal of Psychoanalysis*, **73**(4), pp. 675-684.
- Douglas, M. (1985). 汚穢と禁忌. 塚本利明訳, 思潮社.
- Green, A. (1986). The dead mother. In *On Private Madness*, London Hogarth Press, pp. 142-173.
- Hartocolis, P. (1974). Origins of Time. *Psychoanalytic Quarterly*, **43**, pp. 234-261.
- 北山修 (2021). ハブられても生き残るための深層心理学. 岩波書店.
- 北山修 (1982). 悲劇の発生論:精神分析の理解のために. 金剛出版.
- きたやまおさむ (2021). コブのない駱駝. 岩波現代文庫.
- 北山修 (1988). 心の消化と排出:文字通りの体験が比喩になる過程. 創元社.
- 北山修 (2017). 「内なる外国人」A 病院症例記録. みすず書房.
- 北山修 (2023). 劇的観点から見た人間の「沼」. *精神療法*, **49**(3), pp. 337-341.
- 黒川嘉子 (2004). 移行対象・移行現象に関する二つの視点. *心理臨床学研究*, **22**(3), pp. 285-296.
- 岩崎美奈子 (2016). 移行対象の研究史と展望-移行対象概念の曖昧さに関する考察-. お茶の水女子大学院人間文化創成科学研究科人間文化創成科学論集, **18**(3), pp. 79-88.
- 古澤平作 (1954). 罪悪意識の二種. *精神分析研究*, **1**(4), pp. 5-9.
- Leach, E. (1976). Culture and Communication. *Cambridge University Press*.
- 妙木浩之 (2015). 北山理論の発見. 北山理論の発見-錯覚と脱錯覚を生きる-. 創元社, pp. 2-16.
- 西見奈子 (2019). いかにして日本の精神分析は始まったか. みすず書房.
- 小此木啓吾 (1979). 対象喪失. 中公新書.
- Osamu Kitayama. (1998). Transience:Its Beauty and Danger. *The International Journal of Psychoanalysis*, **79**, pp. 937-953.
- Osamu Kitayama. (1991). Wounded Caretaker and Guilt International. *Review of Psychoanalysis*, **18**(1), pp. 229-240.
- Roheim, G. (1980). 精神分析と人類学. 小田晋・黒田信一郎訳, 思索社.
- 竹内整一 (2007). 「はかなさ」と日本人-無常の精神史-. 平凡社.
- 竹中信常 (1977). タブーの研究. 山喜房仏書林.
- 鷺田清一 (2003). 老いの空白. 弘文堂.
- Winnicott, D. W. (1951). Transitional objects and transitional phenomena. In *Playing and Reality*, New York: Basic Books, pp. 1-25.
- 山本聡美 (2015). 九相図をよむ. 朽ちてゆく死体の美術史. 角川選書.

表1. 北山修による論文、著書、訳書、研究の年表① (1978年～2004年)

年(西暦)	論文名	書籍名	翻訳書籍名	プロジェクト
1978	動き Maudsley病院外来精神療法ユニット			
1979	精神療法と時間的要因 その1, その2, その3 臨床医のための心の科学 處と家の心理学		ぼく自身のノオト 恐怖の意味: 行動療法立場から	
1981	患者の羞恥体験に対する治療者の(受けとり方)について			
1982	目撃者としての子ども	悲劇の発生論: 精神分析の理解のために		
1983	心の中の「父」			
1984	周義的な言葉の精選し機能について 思春期危機の精神分析			
1985		鏡覓と訳鏡覓: ウィニコットの臨床感覚		
1986	話を置いておくということ-非言語化の試み			
1987	比喩化と「織り込み」について			
1988	海外個人研修	心の消化と排出: 文字通りの体験が比喩になる過程		
1989	言語活動としての診療 「羞い」の精神分析 創造と解釈	言葉と精神療法	抱えることと解釈: 精神分析治療の記録 ウィニコット臨床論文集	
1990	構になることについて-睡眠と覚醒の間に 構造と設定-小此木の「構造」 治療的進行-その理論と実践 精神療法における希望と絶望		児童分析から精神分析へ	
1991	精神分析理論の諸特徴について 「抱えること」と媒介的進行 「ありがとう」と言えない-ある青年			
1992	三角関係に向けて 力動的臨床心理学からみた性の発達	ことばの心理学: 日常臨床語辞典		
1993	臨床心理学者の医学的理解について	北山修著作集自分と居場所 北山修著作集言葉の精選し機能およびその壁 北山修著作集見ざるの禁止 こちらから言葉へ		心理臨床家の医療との連携技術の開発
1994	Japanese Tragic Legends and a Maternal Prohibition			臨床心理学的観点からの「思」概念の明確化
1995	On the Therapist's Receptivity towards the Patient's Disclosure and Shame Experience in Japan 治療における「抱えること」 臨床心理学的観点からの「思」概念の明確化 象の象徴性と其の解釈	ウィニコットの遊びとその概念		
1996	春園のなかの子どもたち Beyond the prohibition of don't look	恥	フロイトの書き方	
1997	精神分析の見立て P.マホーニイの紹介	「自分」と「自分がない」 悲劇の発生論増補新装版		
1998	身体とことば-からだの声を聞く 臨床的リアリティをどう伝えるか: 臨床的論文・症例報告の方法 自らをスライムにして生きる患者: モノのやりとりと見立てること 精神分析の論文と言葉 Transience: its beauty and danger		狂気の心理学	養育態度が乳幼児の行動特性に与える影響に関する研究-養育態度を育児文化としてとらえる試み-
1999	開かれた二者関係 自らをスライムにして生きる患者: 言葉と意味の上滑りの取り扱 心のカタチ, ころろの歌			発達臨床ならびに感性心理学的視点から見る日本の育児文化-親子関係の分析を通して
2000	フロイトの症例「ドラ」から学ぶ 情緒と言語化 心と21世紀: 言語的交流と情緒的交流 日本文化の中の親子関係: 浮世絵を通して (27歳と子の間を映す三枚の鏡: 浮世絵・母子イメージ画・語りの中に見る親子関係の鏡像) 日本語臨床と独創性 誇り高き独立学派 二者間内交流と二者間外交流: 浮世絵のなかの母子関係	文化の深層心理学		人生を語りやすくする旅表現の研究-歌詞を活用して-
2001	転移と現実の間-関係を織り込み紡ぎ出すこと 幻滅と訳鏡覓 治療者に求められるもの-ブレインゲイ マネージャーの二面性	精神分析理論と臨床 幻滅論		
2002	描かれた日本の幼児期 精神分析と対象関係論 「思れ鏡」の母子関係-浮世絵母子像を中心に		ウィニコット書簡集	
2003	話すことの役割と境界-分-接の逆脱を生きる 治療記録のための覚え書き-直接話法と間接話法の使い分け 日本語臨床の「見えない心」-非対面法のすすめ 日本文化の光と影-対象関係論の立場から 自分の居場所			
2004	国際的視野から見た日本の精神分析-その二重性と柔軟性 日本の精神分析の黎明期 小此木先生「目をつむむ」とジャズが聞こえます 青年期の創造性: その希望の力をめぐって なぜよくなったか、分らないということ-物語学派的視点から	改訂 鏡覓と訳鏡覓: ウィニコットの臨床感覚 語り・物語・精神療法		

森：北山理論における「うつろい」概念についての一考察

表 2. 北山修による論文、著書、訳書、研究の年表② (2005 年～2023 年)

年(西暦)	論文名	書籍名	翻訳書籍名	プロジェクト
2005	サイコリストのための精神分析学 詩人と空想すること—フロイトの楽観と創造性 連続講座 創造性と精神分析(1)～(7)	キタヤマオサムの本 ふりかえったら風：対談1968-2005 こころを癒す音楽 共訳論：母子像の心理学	フロイト全著作解説 小児医学から精神分析へ：ウィニコット臨床論文集	
2006	日本語と精神療法—特に「矛盾」の取り扱いを巡って 心の物語の紡ぎ方 旅の夜に見た「孫の母親をmatrem nudam」 「夕顔」問題—世話する側の健康、痛つきそして死 「普通がわかる」について	日常臨床語辞典	「おずみ男」精神分析の記録	
2007	心の物語の紡ぎ方 劇的な精神分析入門 日本の母子像：その幻想と幻滅 共に眺めること—母子像研究をふまえて 精神科医のための精神分析—想像と想像力			
2008	河合草雄の生きた中空 言葉で「抱えること」は可能だろうか？ 症例報告における自己責任 性愛と同一性をめぐる「運動」 共演すること		愛着理論と精神分析 患者と分析者：精神分析の基礎知識	
2009	罪悪感の精神分析 治療におけることばの問題「悪いをつくり・悪いをする」方法の基礎として 巻頭言 日本人はなぜ自殺するのか？ 発表した症例の「その後」から学ぶ—蓋をつくる方法 Amie and Its Hierarchy of Love	日本人の「原罪」 悪いをとること・つくること：「わたし」の治療報告と「その後」 罪の日本語臨床		
2010	フロイト精神分析学との土居健郎の「格闘」あるいは「抵抗」について 劇的観点から見た精神分析入門 Prohibition of don't look : living through psychoanalysis and culture in Japan	最後の授業：心をみる人たちへ		
2011	母親、娘、そしてセラピストの未消化物 心の未消化物と「吐き気」	フロイトと日本人：往復書簡と精神分析への抵抗		
2012	日本人の深層心理—精神分析の観点から— 対象の裏と裏、そして普通でいること 「日本人」という抵抗			
2013	未来から学ぶ：精神分析的な精神療法 日本文化とこの成長：人生の裏と裏	評鑑の分かれるところに：「私」の精神分析的な精神療法		
2014	「見ること」と「見るな」の禁止 人生物語の紡ぎ方：劇的観点から 音と文字の間に：意味の分かれるところ 日本の母子像における親子関係 日本の精神分析：「私」を求めて	意味としての心：「私」の精神分析用語辞典		
2015	「重ね合わせ」という困難：真に受けられないように 私の歩んできた道 両眼視と単眼視の間：斜位という創造性 精神療法のための言葉の使用：評鑑の分かれるところに 「見るな」の禁止という反復	北山理論の発見：錯覚と錯覚を生かせる		
2016	痛ついた日本を、水に流さない 分析的枠組と分析的態度について	コブのない猫：きたやまおさむ「心」の軌跡		
2017	「あれかこれか」「あれとこれと」	「内なる外国人」：A病院症例記録 見るな禁止：日本語臨床の深層 週一回サイコロラビ—序説：精神分析からの贈り物		
2018	マネージメントと内なる「壁」 精神分析に対する日本のアプローチと「抵抗」：依存をめぐる葛藤			
2019	私たちの「すまない」 歌いながら考えながら歌う 構造化されていない自己	良(い)い加減に生きる：歌いながら考える深層心理		
2020	自己分析として、そして自己治療のために書くこと 退行受容的な治療の可能性：言語であっても絵画であっても アール・ブリュットから受けとるもの—3 アール・ブリュットは分らない			
2021	コロナと日本人の心：神話的思考をこえて	ぼく自身のノット ハブられても生きるための深層心理学 「こころの旅」を歌いながら：音楽と深層心理学のめぐりあい コロナと精神分析的臨床：「会うこと」の喪失と回復		
2023	劇的観点から見た人間の「沼」 「顕立」という構造化			

(臨床実践指導者養成コース 博士後期課程 2 回生)

(受稿 2023 年 8 月 31 日、改稿 2024 年 1 月 4 日、受理 2024 年 1 月 11 日)

北山理論における「うつろい」概念についての一考察

森 一也

本稿では、心的変化を捉える枠組みとして、「うつろい Transience」を取り上げた。北山によるいくつかの理論と照合しながら、その意義を考察した。結果、「うつろい」が内包する重要な視点として、以下の点が抽出された。①時間をかけることの重要性、②治療者側の複眼視と共視、③傷ついた世話役（と自己）への注視、④日本的罪悪感、⑤「ケガレ」の分析と肛門期的サディズムへの着目、⑥「A と A ではないものが重なり合う領域に留まろうとすること」の臨床理論、⑦三角関係化 triangulation と原光景、⑧対象喪失と死せる母親 dead mother である。以上の点から、「うつろい」は、心理療法において生ずる質的变化を関係性の視座から捉え直し、それを日本文化と関連して考察しうる有用な概念となる可能性が考えられた。今後は様々な領域、文化における「うつろい」を考察する必要がある。また、事例に即し、「うつろい」の病理的、発達促進的な表れを具体的に記述していく必要があるだろう。

A Study on the Concept of “Transience” in Kitayama Theory

MORI Kazuya

In this paper, we discuss “Transience” as one framework to understand mental change. We discussed its significance by comparison with the theory of Osamu Kitayama. As a result, the following points were extracted as important perspectives encompassed by “Transience.” (1) Theory of time; (2) Therapist’s multiple viewpoints and co-viewing; (3) Focus on the wounded caretaker (and self); (4) Japanese theory of guilt; (5) Analysis of “Kegare” and its relation to anal-phase sadism; (6) Clinical theory of trying to stay in the area where “A” and “Not A” overlap; (7) Triangulation and the primary scene; and (8) Mourning work and the dying mother. From the above, we believe that “Transience” is useful for understanding changes that occur in psychotherapy, especially those rooted in Japanese culture. In future, it will be necessary to examine “Transience” in various fields and cultures, and to describe the pathological and developmental manifestations of “Transience” in the context of clinical cases.

キーワード：うつろい、移行対象、日本文化、対象喪失

Keywords: Transience, Transitional Object, Japanese Culture, Mourning Work